

れた母子保健法により、母子手帳システムが法制化され、母子健康手帳と改称された。

2022年4月現在、世界50か国以上で、親と子の健康記録を一体化し、保護者の手で管理できる形の母子手帳が開発されている。その多くは、直接あるいは間接的に日本の母子手帳から大きな影響を受けている。

文献

- 1) 中村安秀. 海をわたった母子手帳：かけがえのない命をまもるパスポート. 旬報社, 東京, 2021
- 2) 厚生省児童家庭局母子衛生課編：日本の母子健康手帳. 東京：保健同人社, 1991

(令和4年4月例会)

『医学とキリスト教』とこれまで、これからの医学史研究

藤本 大士

2021年夏に法政大学出版局より出版された、拙著『医学とキリスト教——日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教』が、光栄なことに2021年度の矢数医史学賞に選出された。それに伴い開催された第34回矢数医史学賞受賞記念講演では、拙著の概要の紹介と今後の課題について報告をおこなった。

まず、拙著の研究史における位置づけとして、医学史およびミッション史の観点から説明した。医学史の先行研究は、日本の医学界がドイツから受けた影響に注目することが多かった。そのため、拙著ではドイツ以外の国からの影響としてアメリカを取り上げ、とくに、来日したアメリカ人医師の多くを占めていた医療宣教師に注目し、その活動の分析をおこなった。次に、ミッション史の先行研究は、日本での宣教がはじまったばかりの頃に医療宣教師が活躍していたことを指摘した研究が多く、日本で宣教がスムーズに進むようになったあと、医療宣教師がどういった活動をおこなっていたかについては、十分な分析が進められていなかった。そのため、拙著では、来日した医療宣教師の活動がどのように変化していったかを描くことを試みた。

拙著は9章構成であるが、それらは大きく3部に分けることができる。最初の3章は、19世紀半ば頃から終わりまでを対象としており、この時期にアメリカ人プロテスタント宣教師による医療宣教がはじまり、拡大し、縮小する過程を描いた。

次の4章では、宣教師の間で日本での医療宣教の意義に疑問が投げかけられるようになる中で、一部の医療宣教師たちが日本で医療宣教が依然として必要であると主張し、様々な事業を振興していたことを示した。最後の2章では、戦後、GHQ/SCAPによってアメリカの医療制度が日本にもたらされる中、戦前から存在していたミッション系の病院が台頭していく様子を描いた。

最後に、拙著で十分に掘り下げることが出来なかった点として、アメリカ人以外の来日医療宣教師（イギリス人、カナダ人など）の活動、日本以外で活動した医療宣教師の活動、カトリックによる医療宣教、日本人クリスチャン医師による医療宣教などをあげ、これらを今後の課題とした。

報告後、フロアからは多くの重要な質問を投げかけていただいた。たとえば、ロックフェラー財団が聖路加国際病院と協力して進めた事業は、キリスト教主義に基づいていたのか、あるいは、日本という途上国に対する支援として進めていたのかという質問をいただいた。これに対する答えとして、ロックフェラー財団自体は、特定の宗教や教派に肩入れすることなく保健事業を進めていたが、実際に現地で事業を進める際には、現地で先に活動していた医療宣教師などと協力することが多く、聖路加国際病院もそれにあたりと説明した。次に、日本でのカトリックの医療宣教がどういったものであったかについて質問をいただいた。それに対しては、カトリックは医師が宣教師

を兼ねることが認められていなかったことから、カトリックの外国人神父が日本人のクリスチャン医師や看護師と協力して、医療宣教が進められることが多かったと回答した。次に、千葉県館山市でコルバン夫人が活動していたが、夫のコルバンの北海道での医療事業について質問をいただいた。それに対する応答として、拙著がアメリカ人医療宣教師を主たる対象としており、コルバンを含むイギリス人医療宣教師について十分に取上げていなかったことから、彼の活動について、私自身まだ知らないことが多いと回答した。最後に、山崎佐氏がかつて、日本の医学史研究においては宗教の部分が欠落しているという指摘をしており、西洋世界では近代医学とキリスト教が密接につながっているのに対し、日本ではそういった

つながりが薄いと考えられているが、その点についてどう考えているかという質問をいただいた。それに対しては、拙著で論じたように、キリスト教精神に基づいて活動してきた日本人医師は多くいたことを説明しつつも、拙著の主たる対象がアメリカ人医療宣教師であったために、日本人クリスチャン医師の活動やその思想については十分に分析できなかったと回答した。そのため、今後は、実際にこれまでにキリスト教として活動してきた医師（そして、日本医史学会にもそのような方は多くいらっしゃると思う）に実際に話をお伺いしていくことで、日本人にとっての医学とキリスト教の関係について考えていきたいと思う。

(令和4年6月例会)

『洋学史研究事典』と医史学研究

青木 歳幸

このたびは、伝統ある矢数医史学賞を『洋学史研究事典』にいただき、編集委員一同大変喜んでおります。ありがとうございます。

なぜ洋学史研究事典の編集にいたった経緯や目的は、受賞記念の挨拶で紹介しましたので、ここでは『洋学史研究事典』が、医史学研究にどのように活用していただけるかという点に絞ってお話させていただきます。

本書で洋学史とは、日本列島の人々は、在来の技術や大陸から得ていた知識を土台に、16世紀以降の西洋の人やモノ、書物から積極的に多くを取り入れ、発展・昇華させ、地域社会でさまざまな達成をもたらしており、その営みの総体を洋学史と定義し、研究編と地域篇の両面から、その研究史を整理・叙述しました。

研究編では、第I章洋学の社会的基盤で、オランダ東インド会社（松方冬子）、商館長江戸参府（松井洋子）、オランダ通詞（イサベル・田中・ファンダーレン）、医療宣教（藤本大士）、幕末のコレラ（海原亮）、漢学・漢方医学（町泉寿郎）な

ど、第II章支えた人々で、カスパル・シャムベルゲル（ヴォルフガング・ミヒェル）、沢野忠庵（平岡隆二）、シーボルト（沓澤宜賢）、モーニッケ、ポンペ、ボードイン（相川忠臣）など、第III章影響を与えたモノでは、植物（平野恵）、動物（小佐々学）、医療道具、医科器械（ヴォルフガング・ミヒェル）、人体模型（青木歳幸）など、第IV章普及した書物では、ガランマチカ（鳥井裕美子）、シーボルト NIPPON（宮崎克則）、ドドネウス「草木誌」（フレデリック・クレインス）、ヨンストン「動物図譜」（勝盛典子）、厚生新編（上野晶子）、マートシカッペイ（吉田忠）、解体新書（石田純郎）、イペイ（八耳俊文）など、第V章. 研究教育の場では、蘭学塾（海原亮）、薬品会（伊藤真実子）、薬園（平野恵）、蕃書調所・開成所（八耳俊文）、長崎遊学（平岡隆二）、長崎海軍伝習所（神谷大介）、ユトレヒト陸軍軍医学校（石田純郎）、幕末のオランダ留学（大久保健晴）など、第VI章近世学芸から近代学術へでは、外科（坂井建雄）、小児科（青木歳幸）、種痘（青木歳幸）、養生・公